

平成18年度 第2回島根県社会教育委員の会

日時：平成19年2月2日（金）

13：30～16：00

場所：サンラポーむらくも 瑞雲

- 1 開 会
- 2 出席者紹介（大國GL）
- 3 事務局説明（ 〃 ）
- 5 議 題（進行：有馬委員）

【協議事項】

- (1) 社会教育関係団体に対する補助金について （事務局説明：星野SL）
- (2) 子どもたちを健やかに育むための環境づくりについて
- テーマ「家庭教育力向上のために」

－質疑・応答、意見交換－

○有馬委員 ただいまの説明で何か質問、意見等ありましたらお願いします。

○松本委員 19年度と18年度と極端に違いますが、補助金の要望がなかったのでしょうか。

○星野SL これにつきましては、中四国以上の大きな大会に補助するというので、昨年は、公民館連絡協議会は中四国の大会で1,000人規模でした。ボーイスカウトは全国大会で、島根県子ども会連合会は、中四国の大会があり補助をしました。来年度は、各種団体で中四国規模以上の大会はありません。

○松本委員 財政難というわけではありませんね。わかりました。

○有馬委員 ほかにありませんか。

それでは、協議事項2へいきます。

(2) 「子どもたちを健やかに育むための環境づくりについて」は、テーマとして「家庭教育力向上のために」というタイトルです。これから、時間をいただき、この社会教育委員の会の皆様の意見交換にしたいと思います。

それぞれの分野で活動されていますので、今の子どもたちの育ちぐあい、実態、実情については、いろいろな角度から感じておられると思います。これまで、社会教育委員の会も事務的な審議や議論をすることが多かったのですが、今日はじっくり時間をかけて、自

由討論といえますか、意見交換の場にしますので、御協力をお願いします。いろいろな角度から意見をいただければと思います。

初めに、幾らかの方々に子どもの生活現状、生活状況や実態について、話の手がかりのような気持ちで提案をしていただけたらと思います。その方々の話を伺ってから、協議、意見交換に入ります。

磯田委員さん、お願いします。

**○磯田委員** まず最初に、島根県子ども会連合会は本年度、補助金をいただきました。おかげさまで11月4日、5日と、ホテル一畑で、約350人の中四国の子ども会活動にかかわる大人たちが集まり、基調提言、分科会、記念講演等、非常に有意義な大会が過ごせましたことに厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。閉会式の時、出席者の皆さんに、事前に山陰中央新報に出した新聞全面広告とメッセージを配って、島根県の取り組みを披露しました。島根県の現状をいろいろと知っていただけるよい機会になったと思っています。

本題に入りますが、島根県の子ども会の実情ですが、子ども会は就学3年前から高校3年生までが会員となっています。子育て支援センターとか、いろいろな流れを通じて、いろいろな立場の子どもたちとのつながりがあります。今日は、年間を通じて遊びを通してつき合っている「城北あそび塾」の小学校の4、5、6年生から見える子どもたちということで、報告をします。

実は、明日から鳥取県の大山の青年の家に1泊2日で雪遊びという内容で行きます。昨日、大山からの連絡では、5センチしか雪がないということでしたが、結果的に午前中、電話をしたら、かなり積もったということで、総員40名で行きます。

年間を通していろいろな活動をしてはいますが、その中で家庭における子どもたちの姿というのは、我々の場合ですと、何かイベントをやるとか、行事をやるときでしかつき合いがありませんので、家庭の実態はかい間見ることはできません。しかし、1泊研修とか、いろいろな活動を通して見えてくる子どもたちは、上手に建前と本音を使い分けるところがあります。子どもは純粋ですからと言いがちですが、使い分けているような部分もあるように見受けられました。

あいさつはきちんとできます。年間を通していろいろな活動をしてはいますし、4年生からの子は3年目になるわけで、顔見知りのおじさん、おばさんがいるわけですから、あいさつ等はきちんとやります。それから、湖遊館のアイススケートに行くときは、一畑電車を

使って行きますが、お年寄りさんが乗られると黙っていてもちゃんと席を譲ります。そういった点は、道徳教育でもありませんが、学校でのいろいろなしつけ、家庭でのしつけといったものは案外きちんとできていると思います。それが、家庭の皆さんでどこかへ行ったときに、お年寄りさんに席を譲るかどうか分かりませんが、団体生活における移動のときは、マナー等も非常にきちんとやります。また、隣り合わせたお年寄りさんが、話しかけられたりしたときには非常ににこやかに話をします。

食については、いろいろ考えさせられるところがあります。団体に食事をとるわけですが、それぞれ研修の時間等はスケジュールどおりに決まっていますが、マイペースです。友達としゃべりながら食べることは、非常にいいことですので、早く食べろとか言いませんが、しゃべりとおしです。しゃべっていないときでも、よその方を向いてぽつんと食べて、またしばらくして、またぽつんと食べます。早い子は15分ぐらいで終わります。そうすると、次のスケジュールがありますので、部屋へ帰って休んだりしたい子もいるかもしれませんが、原則的にはみんなで「ごちそうさまでした」とあいさつをしますから、その間は待っていなくてはいけません。特に女の子に多いのですが、もしよもしよもしよもしよと食べるのだから食べないのだから分かりません。もう終わったかなと思って、「ごちそうさま」をやろうと思っていると、また皿の方に箸がちょこっと行ったりします。一番時間のかかる子で40分ぐらいです。

従って、あいさつはいいのですが、食に関しての気配りといえますか、団体生活でみんなに合わせた形で食べるといったことはないようで、自分のペースで、しかも好きなものしか食べません。野菜などほとんど残飯入に入れるようで、食べない子は本当に少しの食材しか食べませんので、こちらが心配するのですが、元気に活動してるところを見ると、それはそれでいいのかもしれない。

とにかく、御飯をちょこちょこ、おかずは空揚げとかを2つ3つつまむ程度でもう終わりです。サラダやいろいろなものがあっても食べません。でも、それに対しても無理して食べろとは、こちらも言いませんので、残す子は残すということです。せっかく作っていただいた施設の方たちに申しわけないので、残飯を捨てるときは、なるべく見せないようにしてこそっと捨てます。

これは、あそび塾の子どもたちとは関係ありませんが、ある専門学校の先生がおっしゃっていました。現在の専門学校の1年生は、ゆとり教育が始まった第1期生だそうです。とにかくおっとりしてるというか、ゆったりしてるというか、よく言えばゆったりしてる、

おっとりしてるそうです。ただ、自分からいろいろ考えてあれこれ動くということが不得手だそうです。指示待ち人間だそうです。あれしなさい、これしなさいといろいろ言うと、そつなくこなしますが、指示がないとなかなか動いてくれないのが、ゆとり教育から出てきた子どもたちという感想をおっしゃっていました。

あそび塾の子どもたちも若干その指示待ち人間といいますか、自分で考えてあれこれ行動するのは、不得手なところがあります。中には掃除をして、「これどうしますか」って持って来ると、それがごみだったりします。「ごみは、捨てるや」「どこへ捨てるんですか」って、「ごみ箱へ捨てるや」「ごみ箱はどこにありますか」って、「探せ」。そういう感じにつき合いながらやっています。

○有馬委員 何かお聞きになりたいこともあるかもしれませんが、ちょっと後にさせていただきます、次、お願いしたいと思います。木村委員さん、よろしくお願いします。

○木村委員 県中学校長会ですが、県内全部とか市町村全部は、とても把握していませんので、本校、出雲第三中学校の、現在考えていることや、少しずつ実行に移してることを話し、本日のテーマの家庭教育力にかかわった話ができたらと思っています。

3つの柱で話したいと思います。1つは、出雲市の場合は、本年度から地域学校運営理事会を立ち上げると教育委員会から話がありました。小・中、49校のうち全部の学校で立ち上がりました。本校は比較的早く、昨年7月24日に第1回の理事会を開き、その後2回目も開いて、今、実行しているところです。いろいろと理事会の役割が示されており、それを各学校のニーズに応じて取り組んでいます。

本校は、ボランティア部、課外授業部、小中一貫部の3部門に分け、理事がそれぞれに分かれて活動しています。

この中の課外授業部は、4つのコミセンから5名前後エントリーといいますか、コミセンの推薦で人材を選んで、現在28名の人材リストを持っています。総合的な学習の時間に来て、1コマの授業をしていただきます。1年生では中国へ行かれた方の話、2年生は戦争体験を持つ方の話で進めています。

中学生は、どうしても部活と学習でほとんどを費やしますが、ボランティアや地域で頑張るとか、あるいは地域の体育祭の役員で頑張る子は、限られた人数です。そういうボランティアとか本当に地域に出るとか、ガールスカウトや、ボーイスカウトに入るという生徒は、地域連携を自らやるわけですが、残念ながら少人数だということです。私は、学校は、それ以外のすべての生徒に、ボランティアや地域連携の体験をさせていく義務がある

というか責任があるというか、そういう環境をセットしていくべきだと思います。本校では、この様に地域の方に学校の授業に来ていただき話してもらうことを継続してやろうと思っています。なるべく総合的な学習の時間を利用してながら地域のいろいろなジャンルの方を呼んで話を聞くことで、全校生徒が平等に恩恵を受けるということを考えています。

それから、2つ目の柱は、中1ギャップといいますか、中1プロブレムについてです。本校では、今年の7月14日に実態調査をしました。1年生213名、男子107名、女子106名です。本校の考え方は、小学校と中学校は、言ってみれば制度が違うし、当然環境も違う、指導方法も全く違うということで、子どもたちに当然戸惑いもあっていいのではないかということです。いたずらに、大変だ、ギャップはすごいすごい、だからこうしようという発想ではなくて、これは当然あり得ることだ、戸惑いはあるものだという発想で私たちは受けとめています。

アンケート項目の中で2点ほど紹介します。1点は、「現在、三中に入学して1学期の終わりの段階で悩んでること、困っていることがありますか」という問いで、勉強のことで男子58名、女子46名が○を付けました。部活のことでは、男子7名、女子19名。友人関係のことでは、男子13名、女子25名でした。「家庭、家族のことで悩んでいるか、困っているか」と聞くと、男子5名、女子3名でした。これは、私の勝手な印象ですが、非常に少ないといいますか、家族や家庭に対する意識が薄いというか、逆に言えばむしろ勉強、部活、友人関係の方に意識が向いているのが中1の段階ではないかと思っています。

それからもう一点が、「より充実した中1を過ごすために、家族の人をお願いしたいことはないか」という自由記述の問いです。これも今の家族に対する意識が非常に弱く、比較的希薄だということの反映で、あまり反応がありませんでした。「ゲームを取り上げないでほしい」は、男子1名で、中1でゲームを取り上げられる、あるいは取り上げられそうな危険を感じている生徒が1人いるかもしれません。それから、「自由にさせてほしい」「勉強のことを言わないでほしい」が男子2名、女子1名です。これはアンケートの仕方にも関係があると思いますが、比較的、中1の段階ではそんなにがみがみ言われていないのではないかという気がしています。そして、「余り怒らないでほしい」が女子3名、「兄と比較しないでほしい」が女子1名、「お小遣いが欲しい」が女子1名、「協力してほしい」が女子1名、「これから頑張るので、これからもよろしくお願いします」が男子1名、女子2名あり、なかなか謙虚でいい育ちをしてると思いました。

いずれにしても私が言いたいのは、中学生にとって家族や家庭の意識は、非常に希薄だということです。むしろほとんど意識が学校生活の部活とか勉強の方に向いてるような印象を持っています。

ただ、中学生として進路決定とか、あるいは何か壁にぶつかったときに家族の理解がないと乗り越えられません。あるいはよい選択決定ができませんので、今私の学校では、小中一貫教育に取り組んでいます。

中学校1校と小学校3校がありますが、小中一貫プロジェクトという組織をつくって、歩み始めているところです。1つは、9年間でどういう三中校区の子どもをつくるかという、目指す子ども像というかイメージ像を共有します。それから行事を共有します。体育祭や文化祭を、小・中の児童生徒が見学をしたり、教員が見学をします。

3つ目が、人の交流です。教職員が空き時間などに、行事に行ったり来たりします。中には、特に国語と英語については相互の授業研究も必要だとか、TT方式とか、そのような話も出ています。また、同時に行事や活動をするとき、ぜひ保護者にもそういうことをしていることを理解してほしいし、ことによっては保護者も参加してもらおうということを進めています。

最後に具体的な事例ですが、昨年11月4日、来年4月に入ってくる小学校6年生23名のうち105名と、保護者が三中に全部集まり、ドッジボール大会や校舎探検、部活訪問をしました。1、2カ月前の入学説明会や1日入学も大切ですが、それ以前の段階で交流会をやって、少し滑らかな小・中連携をしようということです。一番のポイントは、PTAが主催をします。教職員は、鍵をあけて安全確認をして、鍵を締めるだけです。あくまでも三中校区の連合PTA主催で行われます。半日で終わったのですが、長続きするように、あまり金を使わないでできる範囲でやるということで、子どもを出して、保護者も出ていただき、学校も協力できることはしていこうということで、家庭教育力の向上になるかわかりませんが、進めているところです。

**○有馬委員** ありがとうございます。学校側から見える子どもについて話していただきました。

若菜委員さん、浜田で相談員をしていらっしゃると思いますが、お願いします。

**○若菜委員** 今日は、青少年サポートはまだ相談員の立場から話します。平成16年7月に健康福祉部と教育委員会、警察本部の3部局連携によって子ども支援センターが松江、出雲、浜田、益田に立ち上がりました。その中の浜田の相談員をしています。今日のテー

マは「子どもたちを健やかに育むための環境づくりについて」ですが、地域社会で子どもたちが健やかに育つ環境づくりプロジェクトとして子ども支援センターが立ち上がりました。

センターでは実際、本当に悩んでいる子どもや保護者、年齢に関係なく、幅広い方の相談を日々受けています。受け手として家庭の中や心の中まで入っていくという面では、いろいろな思いというか、1件1件大切に信頼関係を崩さないように対応しています。私たちも、いろいろなところで講演をする中で、地域の方に3つだけお願いしていることがあります。1つは、私たちみんな、3つの生活の場があるということです。1つは、家庭教育、家庭ですよということ。2つ目は子どもは学校、そして働く者は職場ということ。3つ目が、地域社会ということを話しています。

そこで、実際幅広く相談対応をしているのが、小・中・高校生です。高校に行けない、行っていない無職少年たちの相談対応をしています。その中で、私を感じるのは、家庭教育の中のしつけで自己表現、自分の気持ちをうまく話すことができない子どもが増えてきていることと、親自身がまだ親になり切れていない部分で育てられているのではないかと感じます。食事をとっていない子どもが増えていて、唯一学校給食が栄養源として、整った食事を食べている子どももいます。そういう関係からか、落ちつきのない子どもが小学校に多いように思います。そういうところから、仲間集団の中でコミュニケーションがとれなかったりして、いじめをしていたり、受け手として不登校になった子どもからの相談や、いじめをしてる方からの相談とかいろいろ受けてます。

親が余りにも子どもに期待をし過ぎています。それは中学校高学年になると特に感じます。あの高校、この高校、自分がその高校に行ったからということで、是非そこに行つてほしいというような。そうすると、子どもは親から押しつけられて、自分の気持ちを言えなくなってきました。親がこう言ってるからというので、だんだんだんだんおとなしくなります。そして、もう親子の会話がなくなるといことで相談をされる親さんもおられます。

そういうところから、高校にやっと入ったのだけど、親が言ったからというので長続きしません。そうすると、高校中退とかニートの事になっていきます。いろいろな育ちの中で同じような家庭環境で育った子どもたちが、だんだんと無職少年になっていき、非行問題やいろいろな問題を起こします。センターには警察も入っていますので、そういう虞犯の子どもたちの対応もしていますし、就労支援もしています。そういう子どもを見ると、子どもが本当に悪いのではなくて、親の考え方、育て方が子どもに対していろいろ

ろな揺れを与えているのではないかと思います。今も、いろいろな教育をさせなければいけないからというので、親も一生懸命働いています。その中で子どもに対して要望が強くて、つい言ってしまうことも多々あるのですが、逆にそれが子どもには負担になっているのだと思います。それを直接に親には言えないので、第三者には言えるのだらうと思い、私たちは、うまく仲介に入って伝え役などもしています。

また、学校、教育現場からの相談もたくさんあります。うちの生徒がとか言う時は、学校に行って直接生徒に会ったり、担任の先生、校長先生とも一緒に話をします。親さんも家庭のしつけをきちんとしていないことが多々あるにもかかわらず、学校を批判することがほとんどです。うちの子は悪くない、学校は何をしているのか、先生がこうだから、こういうふうに言われたから、うちの子がこうなったというのが、本当の現場の声です。

そういう中で、センターは学校と連携しながら、ある意味では第三者の力として子どもの考えや親の考えを聞きながら、間に入って、あくまでも学校というのは、よいところ、悪いところ、ある意味では長所を伸ばしていただく場所ではないでしょうかと保護者には言います。そのために、先生たちにも、この子には、悪いところがたくさんあるかもしれないけれども、何とか学校に毎日来れるように長所を伸ばしてあげてくださいと、仲介役という形で現場に入ることがたくさんあります。

まだ今は母子家庭や父子家庭やたくさん増えていますが、なりたくてなった家庭ではないと思っています。地域の理解が必要ではないかと思います。あの家はこうだからという声がたくさんありますが、それを当事者が聞かれると、心を痛められます。あえて言えば、そういう同じような家庭環境の子どもたちが集まって、中学生でも夜の徘徊や家出だとかをしている子どもが現実、今います。そういうところにも行って、夜、深夜徘徊すると、あなたはこういうような立場になるんだよとか優しく指導したり、実際、夜訪問してみたり、家庭の中に入って親に言いたい気持ちがあれば言ってごらんというようなこともします。外から見ると何てことない家かもしれませんが、実際何度も家庭訪問してみると、親子の会話ができなく、家庭の中で子どもたちは病んでいるというか、お母さんとも本当は話したいけど話せない、お父さんとも話したいけど話せないというのが実情です。逆に子どもから暴力が出たり、親から出たりというのが、中ではたくさんあります。中学校、高校になると件数は増えています。

ですから、私たち大人が近所の子どもを自分の子として叱ったり、褒めたり、本当に褒められ経験をたくさん持たせてあげると、今の子どもたちはもっともっと伸びていくので

はないかと思えます。

○有馬委員 ありがとうございます。

それでは、3人の委員にそれぞれ違った立場で発表してもらいましたが、今日の意見交換のいわば手がかり、きっかけ、火つけ役をしていただきました。皆さんも聞きながら、言いたいことや意見があったと思えます。今日は楽しい意見交換、あるいは情報交換の機会にしたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

・・・・・・・・・・＜教育長中途出席のため 挨拶＞・・・・・・・・・・

○有馬委員 それでは、三人の発表にひっかけて話していただいても結構ですし、質問や意見でもいいかと思えます。それぞれの立場から並列的に、今の子どもたちの実情、生活実態を話していただいてもいいかと思えます。そうしたことを出していく中で、家庭の教育力をどう考えていくのか、どうてこ入れしていくのかという方向等も出てきたらいいと思えます。

伊藤委員さん、どうですか。

○伊藤委員 教育長さんの話の中に、今度、行政の方で「健康づくり推進室」というのができるということを初めて聞きまして、涙が出るぐらいうれしく思いました。

実は自分が山間部の学校に勤務したとき、子どもたちの想像以上のメディア接触の実態に触れ、これは何とかしないといけないと胸が突き上げられ活動をしました。先ほどの、相談員の方や、中学校の校長先生、あるいは子ども会の活動を聞き、大変参考になりましたし、私の気持ちと一致していると思っております。

幼稚園の状況を聞きますと、幼稚園や保育所では、お母さんが子どもを迎えに来て、子どもに早く会いたいという気持ちはなくて、携帯でメールをしているそうで、子どもがわあっと「お母ちゃん」と走ってきても、メールに忙しいという状況だそうです。また、小さな子どもさんを持つお母さんは、天使の羽という羽を購入して、ゴムか紐で子どもがつながれていて背中にかわいい天使の羽がついていて、それで自分はメールをしたり本を読んだりしているという話を聞きました。

子どもが0歳から3歳までは、一番感受性、先ほど教育長さんが感性とおっしゃいましたが、一番大人への信頼とか社会性を培う、脳がまた活発化して、コミュニケーション能力を育てるべき時期です。しかし、その時期に、お母さんが全然子どもの目も見ないわ、

座布団の上で寝かせておっぱいを片手でやりながら、自分はメールを打っているという状況なども聞くと、何とか早く0歳からの子どもたちを持つ母親支援が、一番大事ではないかと思います。

私は、ノーテレビに取り組みました。ノーというのはテレビ等を全部遮断という意味ではなくて、うまく、いろいろな情報社会と子どもが自分で自分を管理しながらつき合っていくという力を育てたいと思っているのです。幼稚園のときからゲームをやっている子どもは、5年生ぐらいになったら手おくれというのが私の統計をした実感です。快樂脳とか、ギャンブル脳といい、そういうものがやめられなくなってしまいます。特に男の子は、3年生ぐらいのときに闘争的な遊びをして、正常な立派な男性になるのだそうですが、その年代に自然体験をしたり集団遊びがないと、どうしてもゲームの中にしか闘争的な満足感が得られないという実態があります。特に男の子のメディア、ゲーム接触がさらに増加しています。先ほどから家庭の会話がなくなっている話がありましたが、0歳からの母親のコミュニケーションが全くなく、テレビに子守をさせていると、子どもは全く応答性がなくなるし、大人への信頼感を失ってしまいます。

これは小児科医の話です。アナウンサーがニュースでこちらに話しかけます。赤ちゃんが手を伸ばしてコンタクトをとろうとしますが、応答性がないということを子どもがキャッチしてしまいます。それがずっと長くなると、全くコミュニケーションのとれない人間になってしまうということのようです。

ですから、0歳から3歳の一番大事なときに、今、結果としていろいろな問題が起きています。何とか、予防的な措置をやっていながら、幼稚園あるいは小学校で、できるだけ自分の力でゲームや、テレビを処理できる力をつけていかないといけないと思っています。「健康づくり推進室」ができるということで、大きな一歩だと、とてもうれしく思っています。

**○有馬委員** ありがとうございます。

伊藤委員は、小学校の校長先生ですが、就学前の教育、家庭の大事さということに力を入れて話していただきました。隣に就学前の幼稚園長の立脇委員さんがいらっしゃいます。お願いします。

**○立脇委員** 大変ピンピンと来る内容を話していただきました。やはり同じようなことを3点ほど考えております。まず、生活リズムが大人と子どもの境目が非常になくなっている時代です。アンケートをしますと、90何%の人が、9時には寝ている。朝6時半に起

きている。朝食を食べているというところに丸がついています。確かに時々には寝ているかもしれませんが。時々には朝食を食べているかもしれませんが。が、現場の実感としては、食べてきてない子どもがかなりいます。例えばチョコレートを食べてきた。ジュースを飲んできた。ウインナーを1個食べてきた。という朝食の内容が、食べてきたということで朝食になってるということがあるように思います。

生活リズムですが、お父さんがテレビを離せない。ですから、テレビを切って食事しようと思うと、お父さんが怒る。それから、子どもとゲームの取り合いでけんかになる。お父さんもゲームがしたいです。お母さんもゲームがしたいのです。それで、子どもと取り合いになるということも時々耳にしています。

食事の方ですが、松江市の場合は、幼稚園はお昼が弁当です。そうすると、偏食が非常に多い。そして、よく考えて野菜等々も入れていただいています。が、かめない子どもが多い。いつまでも口の中に入れて、ずっと口の中にあるのです。ですから、溶けるようなものは食べれます。ミートボールとかは食べれます。けれども、かみ切るということがとても苦手です。ですから、大変小さく親切にかわいい弁当ができています。サクランボの種は取ってあります。イチゴは切ってあります。そういう弁当を持ってくる子どもが結構多いです。ですから、コンニャクゼリーがのどに詰まるということは、納得がいくような気がしています。

それと、週の初めにいらいらしてくる子どもが多い。月曜日に目がつり上がったような表情をしてくる子どもたちがいます。週の中ごろ、後半になって穏やかになったかなと思っていると、また月曜日に目をつり上げてくるというような。かなり家庭で厳しい生活を送っているのかなと思います。それは多分、子どもも厳しいですが、お母さん方にとってもなかなか子育てがしにくい環境にあるのかなとも思います。例えば、マンション等ですと騒音に対して苦情が来るとかです。この頃はラジオ体操は、夏休みもほとんどなくなりました。それは、朝早くからうるさいという近所の方たちの声でなくなったのです。

ですから、以前ですと、ああ、子どもたちの声がすると喜ばれることだったのですが、レンゲの花を取りに行ったらひどく叱られた例があります。別に田んぼの中に入っているわけではなく、へりで取っているのですが、田んぼの土が硬くなるからだそうです。親がついていながら何ということをしてるのだとあって、私まで叱られましたと聞き、大変子どもと母親が生きにくい社会になっていると思います。本当に保護者だけが悪いのではなくて、そういうことを感じています。

生活リズム等は、見ていると、ある意味では幼稚園に入園したことで生活のリズムが整ってくるという現象もあるようです。それまでは結構寝てるだけ寝ていた方が、入園するとそういうわけにいきませんので、その辺で生活リズムが整ってくると思います。

それから、食育ですが、先日も食のアトリエの先生に話をさせていただきましたが、そういう話を聞くと非常に反応がいいです。ですから、ああそうだって思うと、ちょっと行き過ぎるぐらい急にばあっと野菜が入ったりします。一つずつでいいのですが、大変反応がいいです。

今課題に思っていることは、幼稚園は地域の公民館の方とか、地域の方にお世話になっており、呼んでももらいますし、出かけてきてもくださいます。今、幼稚園の就園率が半分を切っており、場所によっては3分の1ぐらいです。あとの子どもたちは、小学校ですと3分の1がその校区の幼稚園から上がります。あと3分の2近くは20園ぐらいの保育所からやってきます。それほど子どもが広域に散らばっているので、地域とつながる機会がほとんどないと思います。今、子ども会にも入っていない方が結構多いのです。こういう子どもたちは、どこで地域とつながっていくのだろうと思います。

それと、近年特に思うことが、指示待ちということがいろいろと出ております。それは保護者ですが、園から「雨が降ったら遠足は中止します。天気だったら行きます。どちらか分からないときには、電話します。」という手紙を出しました。朝、ざあざあどしゃ降りでした。そうしたら、ああこれは分かりやすくて良かったと思って園に出勤しますと、「中止の連絡がなかった」という苦情が参ります。ざあざあ降っていたのですが、「いや、うちは9階だったので外を見なかったのです。弁当も作ってしまって、、、。」と、とても腹を立てておられます。

また、先日、入学前に給食試食会をしました。例年ですと、「給食試食会をします。メニューはこういうものです。」と、給食会からの連絡文を添付して、ご飯それから何々、何々、何々。そうしたら、「弁当が要るんでしょうか。」という問い合わせが何件も何件も参りました。それは電話でもありますし、担任の方にもあります。それは、弁当は要りませんと書いてなかったからです。でも、数年前まではそれで大丈夫だったのです。

さらに、個人懇談をするときに、自己申告制で枠をつくり何時から何時とすると、以前は人が書いたところには書かなかったのですが、今は前の人を書いてても、その枠に、自分の名前を書くという現象が起きているのが現場の実情です。

○有馬委員 最後に、数年前からというような言葉があったように思いますが、やっぱり

急激に変わった感じがありますか。

○立脇委員 そうですね。私の勤務している園だけではなくて、ほかの園にも同じようなことが起きているようです。

○有馬委員 ありがとうございます。

指名したりして失礼しましたが、どうぞ自由に意見を言っていたきたいと思います。

○若菜委員 ちょっと言いそびれたのですが、この家庭教育向上や、今出ている話題などを実践していく上で、ふと私が考えたのは、そのように悩んでいる、苦しいという子どもを抱えている家族というのは、年収幾らぐらいだと思われませんか。経済的にとても負担があります。幾ら学校のいろいろな補助があったとしても、月、中学校だったら大体1万円ぐらいはかかると思います。それすら払えない保護者もおられます。調べますと年収が、200万円いかない家庭がほとんどです。一方では支援、支援で向上、向上といって苦しめてるような言葉がたくさん出てきているということも感じています。

この間も、ある方から返済ができないという相談がありました。そういう家庭は大体多額の借金があります。それを自転車操業させるために、いろいろな借り入れをされています。その中で、子どもに一生懸命というのも無理があると思いますし、またその原因をつくっているのも本人たちなのですが、支援の方法というか、まだいろいろな形があるのではないかと思います。

○有馬委員 背景には経済の大きな要因もありそうということですね。

どうぞ、ほかにはございませんか。関連しなくてもいいのではないかと思います。

○佐藤委員 昨夜、7時半からの「クローズアップ現代」を、皆さんごらんになっていたと思うのですが、立脇委員さんがおっしゃったように、私たちの年代では考えられないことが現実には起きているのです。雨が降っているのにあると思っていた。9階だから分からなかったというのは、本当にどう言っているのか分からないような状況だと思うのです。昨夜のテレビですが、親が自分の子どもは絶対だと親が信じ切って、学校にどんどんどん苦情を言いに行ったりするのです。何でそこで子どもだけを信じてしまうのかということが、親だから自分の子どもかわいさということもあるかもしれませんが、私たちが子どもの時代では、幾ら先生に殴られようと、何を言われようと、そんなことは帰って私たちは言ったこともないですし、親が学校にどなり込んでいくようなことはまず聞いたことはなかったのです。

今の小学生あるいは中学生の子どもの親の年齢は、40歳前後ぐらいです。その親は私

たちより10歳か15歳ぐらい上の方だと思うのですが、振り返ってみるとバブル期の真ただ中で、それこそ使い捨ての時代が到来してるときに生まれた子どもたちではないのだろうかというところに行き着いたのです。そのころは親も一生懸命働いて、多分その方たちだと戦時中、戦前ぐらいに生きられた親さんだと思うので、何にもなかった時代です。今はいろいろなものがあるから、私たちの苦しみを味わわせないように、子どもにいろいろなものを買って与えたり、子どもの言うことを聞いてやっている時代ではないだろうか、夫婦で話しました。

これは、必ずしもそうだとばかりは言えないのですが、子どもにばかり原因があるのではなくて、それを育ててきた親の責任がすごくあると感じました。

学校で何かが起こったときにも、学校にどなり込んでいく前に、ちょっと考えてみたらと思うのですが、聞けば、かっときてすぐ学校、教育委員会に電話ということになる。これでは学校の先生もたまったもんじゃなと思うのです。これから先、こんな状態がどんどん続いていったら、本当に学校の先生をする者がいなくなるのではないかなという懸念があります。

先日送ってもらった資料のアンケートを見ても、非行的なことがだんだん少なくなっているのですが、一部で上がってきてるところもあります。それを見ると、家庭教育力が落ちているのを、本当に上げなければいけないのですが、親に言っても親がわからないだろうということに、夫婦で結末がつかしました。本当にこの家庭教育力を上げるのに、親たちに何をどんなメッセージを送ったらいいのか、今日は皆さんの意見を聞きたいと思って期待して来ました。

**○有馬委員** ありがとうございます。

最後の言葉ではありませんが、だんだんと家庭に送るメッセージと申しますか、親たちに何をわからせればいいのかという問題も考えたいと思います。とりあえずいろいろ実態、様子を出していただきたいと思います。

**○渡邊委員** 島根県連合婦人会の常任理事をしております渡邊と申します。18年度、補助金をいただいております。19年度も申請しておりますが、これは継続事業で、18年度は大田市で実践活動研究集会をやりました。毎年、松江の県民会館でやっており、最初は1,600人来ていましたが、18年度は会場の都合で928名でした。そこで、いろいろ各地域からの活動を発表をしております。

私は匹見町ですが、ちょっとしたことを耳にしています。益田のある小学校で昼御飯を

食べるまでは、授業にならないほど子どもたちがキレるというのか、ガヤガヤして困るということを聞いています。昼御飯を食べてやっと落ちついたという状況のようです。

それから、保育所では、最近、朝御飯を準備されるということを聞きました。これまでやれば、親は本当にすることがなくなると反発を感じるのですが、でも食べてこない子がほとんどだから仕方がないのだということを聞いています。県内全体、国もですが、「早寝早起き朝ごはん」という中で、10分早く寝て、10分早く起きて、子どもに朝食をとらせるということを強行にやっていたいかなければならないと思っています。

それから、匹見町では、毎年、新春発表会を地域でやり、子どもたちから一般の発表、ふだん学習をしていることの発表をやります。今年、感動したのが、ジュニア太鼓でした。感激、感動、すばらしい演奏をしました。これだけの情熱を持ってやる小学生が20数名おりました。こういった何かに情熱を傾けていくという子どもたちの意欲を、婦人会の総会に見せていただこうとお願いしているところです。これだけの情熱を傾けられる子どもたちの一生懸命なところを、皆さんに御報告いたします。

○有馬委員 ありがとうございます。松本委員さん、お願いします。

○松本委員 皆さん方の話を聞いてますと、母親はいっぱい出てくるけれども、父親がほとんど出てこない。どこにいるのだろうかという。ゲームのときに取り合いするぐらいの父親ぐらいで、あとは母親、母親という形です。父親の存在が云々というようなことが、前にもアンケートでありました。

実は、この前、保護司の方と保護観察所の職員さん等と対談をやりました。そうしたら、いわゆる保護観察に来て、そこで父親が「お世話になります」とかというような家庭は本当にはないそうです。車の中で待っているとかですね。逆に父親が頭を下げて「お願いします」というような子は、まずその段階で、「ああ、この子は更生するな」「もう、これで大丈夫だな」と保護司の方々もそう思うそうです。やっぱり父親をもうちょっと、どう立て直していくのか、この辺が一つの大きなポイントじゃないのかなと思います。とは言っても、けつをたたいても出てこない人たちで、恐らく新聞なんかも読まない人たちで、ゲームだけやっている。これをどう地域の中に溶け込ませていくかということが、母親もですが、大きなポイントとなるのではないのかなと思います。

僕も地域で体協の世話をしているのですが、出ない家庭は限定されていて、出るところは親子で出てくる。出てこない家庭をどう引っ張り出すかという、ここが一番のポイントで、これは100%の世帯の中の90%も占めているわけではないと思います。半分以下

ぐらいではないかと思うのです。この辺を、例えば食事つきだかとか言って、あんまり負担をかけないようなえさをつけて引っ張り出すとかですね。今の国の教育費は、子どもが宝と言いながら、非常に予算が少ないのです。お年寄りにかかる予算の、5分の1か7分の1か、極めて少額です。もう少しお金を有意義に子どもの保護に使って、子どもとそういう家庭をどういうふう引っ張り出すか、教育基本法を変えればいいというものではなく、極めてレベルの低い話なんです。そういうものから紐といて、大人と思わずに子どもと思って、本当にえさでもつけて引っ張り出す。その仕掛けをどうするかというところが、一つの鍵になるのではないかなと思います。ただ、それをどうするかがまだ思いつかないのです。

○有馬委員 福間委員さん、いかがですか。父親を何とか家庭教育の中でうまく機能させる……。

○福間委員 今、聞いていますと、教育現場がだんだんだんだん押されてきているような感じがしてならないのです。どうして、押し返していくかということであろうかと思うわけです。

この間、藤原教育長さんと話をさせていただく機会をいただきました。これは公民館の歴史の中で初めてで、本当に感謝したわけです。

この送ってもらった資料を見ますと、成績については、伊藤委員さん、もう少し小学校は頑張らないといけんわ。それから、悪いことは中学校だ。この小学校の成績が何で悪いのか。あんまりまじめにふるさと教育をやったからかなと思ったりもしました。要は、地域、我々が預かっております公民館のようなものを中心にした地域活動が、救い得るひとつの道ではないだろうかという気がしています。

隣の福島教育長さんの命令で松江市の学校教育プランというものが今できかけています。その中で、学校にスクールアドバイザーをつけたり、クラスサポーターをつけたり、あるいはカウンセラーをつけたり、これでもか、これでもか、これでもか、とやってもこういうことですね。

ならば、その親が言うても聞かんような子どもを、地域が引き受けて、ちょうど団塊の世代がどっと社会に出てきます。いろいろな能力持っている団塊の世代に、学校の応援団をつくってもらい、いろいろな問題をここへ持ってこいと、始末してやるからというようなことが一つの突破口にならないかということ藤原教育長さんと話した後で思いました。

だから、今の状態ならば、恐らくその保育所へ朝飯まで出してやようになると思います。

そんなことをすれば、もう切りがないでしょう。どこかで歯どめをかけて押し返す。あるべき姿を求めていくということが、我々の仕事ではないでしょうか。有馬先生、どうですか。

○有馬委員 男の応援団をどうやってつくるかですね。

○福間委員 僕は、団塊の世代を教育してと思っています。

○有馬委員 ありがとうございます。

○松本委員 団塊の世代が案外甘やかしているといったところもあるかもしれません。団塊ジュニアの孫でしょう。団塊の世代が結構悪いかもかもしれません、意外と。

○有馬委員 教育長さん、何かおっしゃりたいのではないですか。

○藤原教育長 父親の姿が見えないというのは、どうも今に始まったことではなくて、30年前もそうだったのです。僕は幼稚園でPTA役員をして、小学校から中学校までしましたが、小学校の参観日に行ったときに、粘土細工でお父さんの姿を作るというのがありました。大体、3つにパターンが分かれているというのが非常に象徴的でした。1つは、横になってテレビを見ている父親、もう一つはゴルフ、3つ目が釣りです。大体この3つで言い尽くされました。うちの子どもは、おそらく本を読んでいる姿だったと思いますが。

しかし、いざというときにおやじが何とか出ていけば、それでも持ったことが、今おっしゃるように、何かおやじが後ろに引っ込んでしまって、家庭の中でも力関係で男が負けてしまっているのが象徴的な姿だと思います。これをどういうふうにしていくかというのは非常に難しいのですが、そこもやっぱり考えないといけないことだという問題意識は持っています。これが1つ。

全然違った話をしますが、これは公の場でまだ言ったことがないのですが、どうもこの車社会がエゴイストをつくる大きな要因になっているのではないかと思います。はっきり言って、車を車庫から出して、夜、帰って車庫に入れるまでに、1回もスピード違反しない者はいないと言ってもいいです。モラルというのは、それぐらいなレベルのものだという、何か、なり下がってしまったのではないかという感じがします。それから、車を運転していると、人に対する思いやりではなくて、とにかくおらがおらがの世界です。何かこのところにもありはしないかというようなことも感じています。これはまだ全然実証しない仮説で、ちょっと思っている点です。

○有馬委員 教育長さんは車という例を出されましたが、車も大きな社会環境の変化をもたらして人間生活を変えたわけですから、何か今ごろの親の評判が悪い原因の背景には、

そういう社会的な状況、環境の変化の要因がありそうだということです。

親が変わってきた原因を探りながら、親をどうするかという問題を考えていかななくてはいけないと思いますが、親の評判が悪い背景に社会環境がありそうだということです。

福島委員さん、学校の応援団という言葉もありました。市として何か親をうまく使うとか、何かつながりそうなことがありますか。

**○福島委員** 松江市には大変ありがたいことに、旧市内に21公民館があります。それから合併したところに7つあります。公民館等を中心にして応援団の体制が非常にできています。ですから、公民館に学校が、どのように出向いていって活用するかだと思います。待っているのではなくて、出向いていけば、「私は今日はコーヒーが飲みたくて来ました」が、「今日はコーヒーはありません」と言われても、行けばお茶をよばれることができます。電話だったら「ありません」と言われたら、それで終わりだと思うのです。

ですから、やっぱり足を運ぶことが大切だと思います。私も学校にいましたが、つい電話1本で済ませようとする傾向があったように思うのです。まずは管理職が、公民館へ出向いておいて、そして今度は担当の教員が出向いていくとか、繰り返すことによって、そういうことがきちんとできていくのではないかなと思っています。

それから先ほど木村委員さんが出雲市における地域コミュニティースクールと言ってもいいかもしれませんが、取り組みを話されました。松江市は、きちんとした形にはなっていませんが、市内15中学校区ごとに、ありとあらゆることを、その地域の子どもはその地域でということをやっています。まだ特区だとかまでは進んでいませんが、そうやって、いかに地域へ学校が足を運ぶかということだろうと思っています。

**○有馬委員** ありがとうございます。学校側も動けという話ですね。

10分間、休憩をとらせていただきます。その間に冷めてしまわないように、一層燃え上がってお帰りいただきますように、よろしく申し上げます。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・＜休 憩＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○有馬委員 後半よろしく申し上げます。

どうやら、今の親たちの家庭における教育力と言うか評判がよくなくて、歴史上始まって以来悪い時期なのか、昔からそうだったのか、そこは意見の分かれるところかもしれません。いずれにしても問題点を多く感じる場所です。子どもに現われているさまざまな心配な事象が、親の家庭における指導力や家庭生活のあり方に非常に大きく関係しているのではないかとのことです。

親がどのように育ってきたかということも問題ですし、先ほど教育長さんおっしゃったように、親が育ってきた過程で、親が自然に社会的な様々な諸条件の中でなってしまったものがあるわけです。

親の評判が悪いのを聞きながら、私自身は学校教育に携わってきた人間ですが、私などの年齢層がそういう親を育ててきたということで、非常に肩身の狭い思いをするわけで、おまえらがしてきた教育は何だったんだと。その親のおかげで、今子どもが大変なことになっていると。こういう構造になっています。もちろん、そろそろ退く者は仕方がないですが、ある意味では責任もとらないといけないと思っています。

どうぞ。お願いします。

○神委員 1カ月ほど前ですか、テレビの有名な番組で、小さい子どもが自分の父親をぐみと言いました。ひどかったですね。そういうことをやって笑いをとる番組のレベルの低さ、それも私たちは考えなければならないと思っています。

今日、いろいろとお話を伺う中で私なりに思い出したことがありますので、話させてください。

7年前に石見に赴任してきて一番最初に驚いたことがあります。三隅の国道9号線の点滅信号が、赤になって子どもが渡りました。その子は、渡る前に帽子をとってぺこっとおじぎをしました。渡り終わって、こちらを振り返ってもう一度おじぎをしました。私はこの子たちはどうしておじぎをするのだろうと思いました。京都にいた時、学校に二十ぐらいの男の方が入って、逃げる子どもをめった刺しにして自分はマンションの上から飛びおりたという、殺人事件が起きました。ちょうどその時に、私たちは引っ越しをしてきたのです。ですから、まずそのことが信じられませんでした。

それから、子どもが学校から帰ってきたときに2つ目に驚きがありました。私は、息子が2人、娘が1人いますが、下の子が今、小学校6年ですが、1年生に入ったときに引っ越しをしてきました。そうすると、よその子が、「〇〇君のお父さんだ。ただいま帰りま

した。」って言いました。「ただいま。」は聞いたことがあります、「ただいま帰りました。」までは初めて聞いたのです。あ、そうか、「ただいま」ってこういう意味だったんだと、子どもたちに教えてもらいました。

そういうことができていたのが、今のような時代、声がけをしてはいけないよ、変なおじさんが連れていくかもしれないよということがどんどん出てくる中で、三隅でも横断歩道を渡って帽子をとっておじぎをするというすてきな光景が、もうなくなってしまっています。運転していて、そのような光景に出会うと、その日1日、何かすごいうれしい気持ちになるんですね。そういうのが益田ではまだあるのです。要するに、学校の、あるいは校区の方たちの取り組みによって、それがなされているところと、なされていないところがあるということを今強く思います。

それから、きょう冒頭で発表がありました。私は美術館の学芸員をしていますが、毎年ふるさと学習の合宿をします。1泊2日で1年生から6年生まで皆連れて行いって、3食食べさせるわけですが、「いただきます」ができません。「はい、いただきますしますよ」と言って、いつまでもできなければ私は黙っています。「食べましょう」とも言いません。そうすると何度も通ってる子はもう分かっていますから、「あかん、それはだめ」と教えるんです。どういうことか、今度は、「いただきます」と、かしわ手を打つんです。「それは違うで。合掌だろ、手を合わせるんだろ」と言ったら、「学校の先生がするって」「親は」と聞くと、「そんなんせん。」、それじゃもう話にならないです。「そうじゃなくて、静かに手を合わすんだよ。」と、上の子たちが下の子たちに教えるまで、私ら大人はじっと待っています。そのときに限って、おなかがすくんですよ。そして御飯が始まります。嫌いな食べ物は絶対に手を出しません。白御飯のみ、黙々と食べています。おかずはと思ったら、みそ汁のときはみそ汁に集中。白御飯は白御飯に集中。魚、あ、嫌い、私、無理。そんなふうになります。でも、3食になりますと、いよいよおなかがすきますから食べざるを得ないのです。そうして食べたら、「うまいね」と言うのです。今食べたの何か分かるかと。豚。イノシシ。「ええ、気持ち悪い」って言うんです。食わず嫌いです。家でそんなもの食べてないと。そりゃそうでしょう、最高のごちそうだよと言うのですけれども、そういう経験すらもうなくなってしまっています。じゃ、それは家のせいですか、親のせいですか。親が教えないからかと。実は親も教えられていないことがあります。

高校の卒業式に3度出ています。今ごろの卒業式で、皆さんびっくりすることがあります。40代のお父さん、お母さんです。式の最中、コートを脱ぎません。腹が立ちます。

子どもたちの門出です。その時にいくら寒かろうと、暖房はがんがんたいているのです。その中で280人程度いるのですが、20人ぐらいはずっとコートを着ています。私は司会の先生に、「携帯のスイッチとコートはとりましようって放送しましょう。」と言ったら、子どもじゃないんだからと言われました。でも、コートを着ていることに何の罪悪感というか、おかしいということを感じない親が今、どんどん出ています。私は昭和29年生まれですが、私らの世代でもそういうような者が出てきています。何が言いたいかといいますと、親もしつけられていません。だからしつけられていない親は、子どもたちにそのしつけをすること自体がもうおかしくなっているのです。

今、私たちは、子どもにちゃんとそういうしつけを、伝えていかなければいけない本当の最後の段階まで来ているのではないだろうかと思います。手おくれになるのではないかと思います。おじいちゃん、おばあちゃんも若いです。50代、60代のおじいちゃん、おばあちゃんはもうそれができなくなっていますから、それこそ地域の力、70歳代の方たちがおじいちゃん、おばあちゃんの知恵をどんどん出して行ってほしいです。そして、学校も地域も一丸となって、伝えていくという運動をしていく時期じゃないのかなと、今日つくづく思いました。

○有馬委員 ありがとうございます。

皆さんも納得されて聞かれたと思いますが、ほかにございませんか。

○奥田委員 ずっと皆さんの意見を聞いているうちに、何となくこの辺がもうたまらない感じになってきました。立脇委員さんの雨のときにはまだ笑っていたのですが、だんだん笑えなくなってきた、何かすごく重たい気持ちでいるのです。正直なところ、解決策もわかりません。でも、今これからやろうとしてることが、家庭教育力を向上するために、その切り口を「早寝早起き朝御飯」に求めています。当たり前のことだと思いますが、それができないこともわかりました。

なら、自分も含めてみんな真剣に、その当たり前のことをどうやったらできるか、この数年間必死になるしかないと思いました。切り口はいっぱいあるかもしれませんが、「早寝、早起き、朝御飯」を何年やってもだめだったはということはないと思いますので、本当に成果が出るまで粘り強く、いろいろな人が、それがなぜ求められているのか、なぜいいのか納得できるように取り組んでいくことが大切ではないかと思いました。できない人を責めるのではなくて、当たり前のことをわかって、それがみんなできるようになるというのは、ある意味また大変なことじゃないかと思います。いろいろ切り口はあるだろうけど、

話聞きながら、「早寝、早起き、朝ごはん」に今後数年かけてみるということしかもう浮かびません。皆さんの気持ちや、もやもやを少し自分でおさめるには、自分も含めて、これから地域に帰って、それに取り組むことかなと今、思いつつあります。

私、海士町ですが、2つほど最近感じたことがあります。Iターンの方にたくさん、うれしいことに来ていただいています。1月6日に私の隣に30代の若い御夫婦が明石市から、5歳、3歳、6カ月のお子さんを連れていらっしゃいました。休みのたびによく土いじりをしてるのです。まだ来られたばかりですが。その若い奥さんは、私が回覧板を持っていくと、「春になったら野菜づくりを教えてくださいね」って言うのです。うちは、すぐ目の前に畑がありますが、全部おばあちゃんが作っています。「多分、私たち田舎でも、私から下の年代は、とって食べることはしても作れません。作ろうという気もないと思います。」って話したら、「えっ、そうなんですか。田舎の人はみんな作って食べてると思っていました。」と言われました。じゃ、私も弟子入りしますから、春から一緒にうちのおばあちゃんと畑づくりの弟子入りしましょうと話しているところです。そこのお父さんが、子ども会の行事に誘っていただき、とんど焼きに行って、自分は感激したって言うんです。うちに夜、遊びに来られて、「何があったのですか」って言ったら、「とんど焼きに行ったら、うちの子どもは、初めての顔合わせだったのだけれど、何の違和感もなく、上の子が全部うちの子の面倒を見てくれた。」と言われました。当たり前じゃないって言うけど、それにすごく感動して、「やっぱり僕はここを選んで来てよかったです」って言われるので、私は全部子どもが出てしまっていますので、それを同じようなお父さん、お母さんに言ってあげてよねって言いました。

私たちの年代の子ども会を一生懸命やってきた母親、地域のおばさんが会うと、「あの活動は大切だったよね」、「あれはよかった、あれがあるから今の私たちがあるんだよね」って言うのですが、それを今伝えるすべがなくって、言うとか何かお仕着せ、「昔はよかった、私たちは頑張ったのにあんたたち何してるのよ」って言われても、絶対今の方は引くって言うのがわかってるので、そういう押しつけでなくて、何か伝えられないかなということが、我々の、今おばさんたちのテーマなんですけど、そのIターンの方の言葉で、ああ、いたと思いました。伝えてくれる人がいたなと思って、その辺はその方にお任せしようかなと思って、それを一緒にいたお父さん、お母さん、これからお付き合いする人たちにも、「いいね、ここは」ということを言ってあげてよねというのを、つい最近言いました。

○有馬委員 どう伝えていくかということにかかわって、非常に大事な提案があったと思います。それから前半では焦点化するという、働きかけの仕方をあまり分散させないで、「早寝、早起き、朝御飯」一発でやるという戦略的なことも考えないといけないと思いました。どういう戦略がいいかという点もまた議論いただけたらと思います。

○渡邊委員 先ほどの話につけ加えですが、今の匹見も子どもが少ないものですから、太鼓をしながら、神楽に熱中しています。中学校、小学校とも神楽クラブで一生懸命やっています。発表の場に、お父さんが来てビデオを並べて、その様子を全部おさめます。神楽をやれば、自分の子どもが出て舞う、太鼓をやればそれ。子どもたちほとんどが、その神楽にも太鼓にも入り、一人二役、三役をやります。そういったことから、お父さんが一生懸命で我が子のやってることをビデオにおさめていくということがずっと続いています。ほんのささいなことですが、お父さんが顔を出して一生懸命でやっていることをつけ加えさせていただきました。

○有馬委員 お父さんのかかわり方の一つですね。

○有馬委員 若菜委員さん、どうぞ。

○若菜委員 せっかくですので、寺本委員さんに、私はPTAとして、意見というか教えてほしいのです。子どもたちの家庭教育向上には、学校とPTAがパイプをきちんとつないで、当事者の保護者がスクランブルを組んで、各学校で取り組んでいかなければいけないことが多々あると思います。

あと1点は、今日は男性がとても多い。皆さん、お父さんではないかと思うのですが、妻に対して子育てにどれぐらい協力をされてきたのか意見を聞きたいと思います。

○有馬委員 私も痛いところを、つかれましたが、寺本委員さん、お願いします。

○寺本委員 今の質問は後にして、私が思っている家庭の教育力ですが、よくPTAの中でも、実際に我々はいつどこでだれに、そういう家庭の教育力というものを教わったんだろうという話をよくします。結論は出ないのですが、恐らく我々が子どもに親から受けた教育というのが一番大きな影響を受けているのではないかとということが1点と、もう一つは学校での道徳教育です。もう一つが社会に出てからの組織の中でのいろいろな人とかかわりとか、会社のルール、その中でいろいろなことにもまれながら自分が成長していった部分、この3つかなという話をしたことがあります。

今の親は、やっぱり親がきちんとしっかりしなくてはいけないという意見は必ず出てくるのですが、ほとんど自覚していないのです。自分は悪くないと思っている親が大半です。

ですから、家庭教育力を上げるという、本当に大事なことなのですが、結局自覚がないから人ごとだと思っている部分があるという気がしています。

P T Aとして、まずそのP T A活動にたくさんの人に参加してもらうことが、とにかくたくさんの人で同じ取り組みをしていくことが非常に大事なことだと思います。少なくとも横のつながりで学年活動もっと強化していかなければいけないと思います。まずその同じ世代の、同じ年齢を持つ親同士で、少なくとも顔ぐらひは合わせて、一緒に活動できれば一番いいのですが、少なくとも学年の親同士は、お互いに知ることがまず大事ではないかと思っています。

それと、縦の連携については、P T A役員としての我々の役割だと思うのですが、これもなかなか急には成果は出ないかもしれません。P T A活動に出てくる親と出てこない親がいるという話はよくあるのですが、それを人のせいにははいけないと思います。P T A役員としての努力が足りないのではないかという話も出て、確かにそうなのかなと思いました。出てこない人が悪いのではなくて、出てきていただけない自分が未熟だという、気持ちの切りかえも考えていかなければいけない気がしています。

先ほど奥田委員さんが言われました、「早寝早起き朝御飯」ということで、皆さんのお手元にチラシがありますが、2月24日、25日に「子どもの生活リズム向上全国フォーラム i nしまね」を雲南市で開催します。これは、教育委員会と実行委員会を組んで、私が今回この実行委員長をさせていただいています。私も奥田委員さんと同じで、あれもこれもということではなくて、まず生きていくためのやっぱり寝ること、食べること、そして体を動かすことというのは、まず大事なことであって、これから始めていけたらと思っています。このフォーラムをきっかけにP T A連合会でも、この生活リズムという部分を県内でのP T Aの活動の柱として取り組んでいく方向でいきたいと思っています。

私は、家庭教育力の向上というのは、さまざまな切り口はあるかもしれませんが、先ほどの意見と同じように、この生活習慣というものに絞ってやっていくというのが、まず第一段階ではないかなというふうな気がしております。

もう一つは、メディアです。メディアづけが気になる場所ですが、これもこのフォーラムの中では、そのメディアに対しての怖さを取り上げていきますので、この生活習慣というのがすべての家庭教育力を向上していくためのまず基盤になるのではないかという気がしています。

このフォーラムは、皆さん、ぜひとも雲南の方まで足を運んでいただいて見に来ていた

だきたいと思います。また伊藤委員には、パネリストとしてパネルディスカッションに出  
ていただくことになっておりますので、皆さん、よろしくお願いいたします。

2つ目の質問については、ほかの方にまた振りたいと思いますので、よろしくお願  
いします。

**○有馬委員** ありがとうございます。

どの親も保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校のPTAにかかわっていきま  
すので、PTA活動がどのような役割を果たすかということも重要な課題、テーマでもあり  
ます。

**○小川委員** 私は自分自身に子どもがいないので、ちょっと疎外されたような気持ちにな  
りながら聞いていました。でも家庭教育力の話の中で、母親批判といますか、母親に責  
任があるという感じに聞き取れるような意見には、仕事柄、敏感に反応してしまい、父親  
はどうしてるのっていうところを思っていたときに、松本委員さんからそういう言葉が出  
て、救われたような気になって聞いていました。

家庭教育力を上げるのに、先ほど奥田委員さんが言われたように、例えば、「早寝早  
起き朝御飯」に絞って、何年か集中して全力を注いでやりましょうというのは、私もす  
ごくいい取り組み姿勢だと思うのです。それを例えば、チラシというリーフレットをつ  
くられたときに、少し1点だけ感じるのは、どうしても話が家庭、学校、地域にすごく集  
中してしまって、いわゆる企業の人にはだれももいないということを感じます。アンケ  
ートをとると、非常に家庭のことに参画したいという気持ちはあるけれど、仕事柄そ  
れを許さない、時間が許さない、家庭に帰ろうとすると、いつリストラにあうかわ  
からないという状況で、本当は家庭に参画したくてもできないというお父さんもた  
くさんいらっしゃると思うのです。

そういう意味では、企業への働きかけを今後はされていかれるといいかなとい  
うか、私たち自身もしていかないといけないのではないかなと思っています。こ  
ういうフォーラムを見ても、メンバーは学校関係者、PTA関係者、そういう人  
たちばかりで、企業の人顔ぶれが見えません。こういうのも、企業にどこ  
まで声をかけていらっしゃるのか、どこまでこういうリーフレットを配布して  
いらっしゃるのか、企業の経営者の方はこういうことをやってることに実際  
気づいているのだろうかというように、少し感じます。今後は、働きかける  
対象も広げていくと、多少は影響が出るのではないかと思います。

○有馬委員 ありがとうございます。

企業へも働きかけてはどうかという新しい視点をいただきました。最後に仲野委員さん、先生の立場から家庭教育力の向上はこれだということを1つか2つ、簡潔にお願いします。

○仲野委員 まず、子どもの生活リズム向上ですが、どちらかというと学校中心に時間がつくられていますので、それで考えると、私と、妻とも多分二、三時間ずれがあると思います。そのずれを、何とかうまく合わせなければいけないと思うのですが、大人の生活リズムの改善を一緒にやらないと絶対にこれは無理だと思います。ですから、僕が今できることは、せめて食事だけでも1回は必ず、朝か夜かは合わせるようにしようと思っていることです。そうしないと、仕事の関係で遅くなったり、朝早かったりして、子どものリズムとどうしても合いません。だから、子どものリズムを整えるのは、意外とそれほど難しくはないと思います。ただ問題は家庭教育だから家庭の中のリズムをどうするのかということが、一番ポイントではないかなと思います。そのためには、さっきおっしゃるように企業の方とか、会社勤めの方には、勤務時間の問題もあります。私でいえば公務員の勤務時間の問題とか、いろいろなことを考えながら、生活リズムはつくっていかない限り、なかなか子どもだけ早寝早起きしろと言いつても無理ではないかと思います。そういう意味では、大人と子どもの生活リズムをセットで、どうするかということが大事ではないかと思っています。

さっきから出てます、おやじの役目ですが、それなりに男親としての役割を考えて、こうあるべきだという家庭図をつくりながら妻と話してやっています。いろいろな家庭があっただけいいと思います。いろいろな生活リズムがあっただけいいけど、私は私の家庭のリズムで、家庭のおやじのあり方でやっているし、それは一概に言えないと思います。ただ、大事なのは、それぞれがきちんとした役割を持って、それを認識してやるしかないと思っていますので、多分僕のやり方を言うと批判を受けるとは思いますが、子どもからはやっぱりお父さんってのはこういう人なんだなと、お母さんはこういう人なんだなと思っただけのようなしつけをしているつもりです。ですから、そこは、お父さんもお母さんも同じだとか、絶対そんなことない、違うしつけをしています。それは確かですね。

それで、もとに戻りますが、奥田委員さんがおっしゃるように、子どもの生活リズムと大人の生活リズムを、一緒になってどう調整して、家庭での親、人間関係づくりをするのかということは、ポイントではないかと思います。そうすると、そのリズムが一つのちょうどいいきっかけになるとは思いますので、そういう意味では、この標語が生きてくると思

います。

別の観点で1つだけ話します。地域社会には、生活知恵とか地域社会の知恵とかいって、多分、私たちが生活するのに何百年もの間につくった知恵がありました。その社会の仕組みの中に、子どもたちが流れて入っていくことで、そのときそのときに必要なことを学んでいくリズムがあり、昔は若衆の集まりとかいろいろあったりして、社会人になっていくステップがあったのです。それは、別に捨てる必要はなくて、いいものは残して、その仕組みを地域社会の中で受け入れる仕組みを考えた方がいいのではないかと思います。何となく一人一人が勝手に動いているから、そういう仕組みづくりもあっていいのではないかと思います。

昔、失業対策事業というのがあって、失業者たちの救済があったのですが、児童生徒のための事業があつていいと思います。別にそういう子どもたちがいれば、社会で働くとか、社会の中でいろいろな活動ができる仕組みづくりをし、それにかかる経費とか、場合によってはボランティアではなくて、働いたらお金をもらう仕組みがあるのだと社会の人が教えるとか、そういうことにお金を使ってもいいのではかと思ひます。つまり子どもたちには、小遣いを超えないような形の、自分で稼ぐという社会の中で、働くことと、その意義と社会の仕組みを学ぶということが大事だと思います。そして、社会の一員になっていくような、そういう知恵を、新しい地域の社会の中で受け入れる。自分の存在を地域の一員として認めてもらうような仕組みづくりというのも、こんなに不登校の子がいるのだったら考えていいのではないかと思います。社会的な仕組みづくりをもう少し考え直した方がいいのではないかと思います。

**○有馬委員** ありがとうございます。

時間が来ておりますので、終わらなくてはいけないということ残念に思ひます。まだ御発言いただきたい方もあつたのですが、お許しいただきたいと思ひます。

たくさんの意見をいただき、私自身も楽しく、すべてうなずきながら納得しながら聞かせていただきました。おそらく議事録としても整理されるのではないかと思います。もう一度、それをかみしめながら、この家庭教育力の向上に、我々がそれぞれの分野でどのように寄与できるか、それぞれのお立場でお考えいただくとともに、また周辺に働きかけをしていけばいいのではないかと思います。お話ししたいこともございますが、時間が来ておりますので、これで終了させていただきます。御協力ありがとうございました。